
とある変種の超能力者（イマジンムーブメント）

架引

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある変種の超能力者（イマジンムーブメント）

【Zコード】

Z0866P

【作者名】

架引

【あらすじ】

【H23.11.30・更新再開】学園都市に、一人の新入生がやつてきた。彼らは一風変わった原石の能力を持つていた！？その能力者の片割れはさらにとんでもない過去や交友関係を持つて……。超能力生み出す科学と世界をまたにかける元勇者が交わるとき、物語は収束する！ この小説は主人公最強・原作キャラ改变要素が色濃く入っています。苦手な方はご注意ください。

主人公設定

(H23.1.10・魔術の設定について捕捉)

主人公

【名前】
新座 橋胡

【所属】

とある高校（上条と同じクラス）

【ステータス】

筋力	B	耐久	C
俊敏	C	魔力	EX
幸運	B	宝具	A・EX

【スキル】

?

【宝具】

シャルフレイバーズ
共鳴すべき聖靈の剣

シャルフレイバーズ

共鳴すべき

聖靈の剣

聖靈

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

の

剣

聖

靈

</

集束すべき期待の腕輪 EX

レンジ： - 分類：対人宝具 捕捉：1人

装備者に対する世界中の人々の期待を受け止めて、装備者の魔力に変換する宝具。歴代の勇者達はこれを誓いの腕輪として装備していたとされ、神造兵器となつていて。初代勇者が四人おり、歴代の勇者に受け継がれてきたが、人数がまちまちだつたために四つ全てが神造兵器と化した。

勇者としての資質を持つ存在、あるいは世界に勇者として選ばれた存在のみが持つため、この腕輪を持つものは尽くが英雄となり、死後英靈となる。

その本質は、死の否定。誰か一人でも期待を寄せている人や担い手の死を否定したい人がいる限り、殺されても何度も蘇生する。

歴代の勇者全員に託された願いや期待全てが込められたこの宝具は異世界の神造兵器だが、世界が違うことによつて大幅にパワーダウンしているにもかかわらず、その強力な本質はなおもEXランクを下らない力を持つ。

担い手が死亡すると、腕輪の力は周囲の魔力をかき集めて宿つてゐる力を担い手となつた英靈自体へと写し、元の世界の誓いの祭壇へと転移して、眠りに就くとされる。

幻想移動 EX

レンジ：無制限 分類：対界宝具 捕捉：無制限

原石の超能力（＝魔術（魔法？））。世界を救つた英雄の能力として、宝具化した。あらゆるものを作り出しながら対象者を飛ばすため、誤差が一切ないのが特徴。空閒移動させる能力。ものや移動先などの制限はなく、移動元や移動先が例え異世界であつても可能。

因果律を操り、対象物Aが移動先Bに安全に到着したという結論を作り出してから対象者を飛ばすため、誤差が一切ないのが特徴。ただ、11次元でも、第二魔法『キシュア・ゼルレッチ』でも無い、

全く別の、謎の理論で発動する、不透明な部分の多い能力。

別の世界には、人物や場所を設定する必要がある関係上、会つたことがある人がいるか、行つたことの場所がある世界にしか行けない。

能力使用の過程上、魔術的な防護機能が働いていたとしても同ランクのものでない限りそれを貫通する特性を持つ。

想像した対象、あるいは場所は曖昧な想像でも設定できるが、あまりにも曖昧過ぎると逆にランダムに転移してしまう恐れがあり、危険である（例えば、盾になりそうなものと想像すると、人が召喚されることがある。また、安全な場所と想像しても、『安全な場所』安全地帯の標識があるところ』となることもある）。

大天使や神なども樂々と召喚、送還が出来る。（が、制御するためのスキルはない）。また、同じ空間移動能力者でも、互いのAI M拡散力場が干渉し合わないので、移動させることが出来る。

移動を実行する前に、移動先の情報がリアルタイムで頭に入り込んで来る。

完全な手順を踏むと詠唱に換算して十小節で、確固たる詠唱をしないよりした方が負担は少ない。

【その他】

エフェクト・アンド・ケース
確定された全ての結論

レンジ：近距離～中距離 分類：対人・物魔術 捕捉：1～1
0人

あらゆる因果を操作し、またはその特性を持たせる魔術。因果属性を操る新座が数少ない魔術の一つ。

転移魔術

レンジ：無制限 分類：対界魔術 捕捉：無制限

対象を、離れた空間へ転移させる。空間移動と異なり、移動元と移動先の一空間の間を通らない（空間移動は1～1次元上では間の空

間を通りている)。

我流戦術・攻

因果を逆転させ、攻撃して当てるのではなく当たったといつ事実を作り出してから実際の行動に移すといつもの。回避するには呪いなどを打ち消す加護かよほどの運が必要。

我流戦術・守

因果を操作し、相手が攻撃したときには既に回避していたといつ結論を導き出すもの。フラガラックに似ている。

我流戦術・舞

空間移動能力者特有の戦術を駆使した戦術。いきなり空間移動したかと思えば上空からドロップキックを食らわせたり、武器で攻撃を仕掛けたかと思えば当たつたり防がれたりするその直前で、勢いを残したままの状態で転移して別方向から回避困難な奇襲を食らわせたりなど、攻めと守りが一体化した戦術。

無論、因果律の操作も使用しているため、この戦術を使われるとほぼ勝つ事は出来なくなる。

【来歴】

十一歳の頃に、とある異次元世界へ勇者一人として召喚されており、その役目をまつとつしたために英雄化。能力が宝具となつている。

因みに魔術回路の制御指導者は遠坂凜。

ヒロイン・但し非メインヒロイン

【名前】
前橋 早佳

まえはし そうか

【所属】

とある高校（上条と同じクラス）

【ステータス】

筋力	C	耐久	D
俊敏	C	魔力	A +
幸運	C		

【スキル】

記憶力 B

一度見聞きしたものをどれだけ覚えていられるかを示す。ない場合は人並み。

Bでは完全記憶能力があるが、瞬間記憶能力は無いため、記憶する対象をしつかりと見る必要がある。

【宝具】

なし（*）

【その他能力】

亜空間倉庫
インフィニティホールダー

A +

レンジ：近・中距離 捕捉：0・001～107509kg 収納
限界：107509kg

原石の超能力。但し宝具ではない。新座の能力が宝具なのは新座が異世界で英雄と化したため（*の理由）。

あらゆる物品を独自の亜空間にしまい込める。

ただし、最低でも1グラムなければ発動出来ない。収納限界を超える場合は発動出来ない。仕舞うときは視界に移っている範囲でしか入れられず、かつ合計質量が30000キログラム以上または総数量が300を上回る出し入れは体に大きな付加がかかる。

独自空間内の物品は時間が止まる。また、物品出現時の性質的には、空間移動能力のそれに限りなく等しい。

この二次創作小説におけるその他設定

【魔術】

とあ魔の魔術は厳密に言うと『魔術回路がない人が、魔術のようなものを扱うために作り出した技術』のため、魔術回路があり、かつ既に覚醒している人はとあ魔の魔術は扱えない。正確には扱えないこともないが、魔術回路の制御を行い、OFFにしないと異なるプロセスによる魔術行使で過負荷が掛かる原因になる。

これは魔術回路が異形の力に過剰反応し、暴走を起こすためである。

また、固有結界の基である心象世界は自分だけの現実であり、超能力開発は心象世界の確立に相当する。

よつて、『能力の才能がある』＝『魔術回路が豊富』ということに繋がっている。

新座が因果律を操ることが出来るのは、新座の能力に『因果律の変換』が含まれているからである。

また、魔術師が超能力者の能力行使に魔力を感じないのは、とあ魔の魔術師が指す『魔力』と、能力者達の『魔力』が別物のため。

【時差】

新座が以下の世界へ移動する際、時差が発生することがある。

原因是、本人は気付いていないが、新座が移動する際の時間算出法が、『その場所（又は人物）に最後に訪れた（又は会った）時からどれだけの時間が経過したか』に依存しているためである。

とあ魔世界 型月世界 六ヶ月弱過去

とあ魔世界 IS世界 一ヶ月弱未来

#01 いざ学生の街へ

四月一日。多くの組織が事業などの年度の開始基準としているの日。

新座橋胡は学園都市に向かつて歩いていた。

「つか、学園都市つてどっちだよ！」

はずが、道に迷つてしまい、たどり着けずにいた。

（はあ。素直に幻想移動（イマジンムーブメント）で行くか？ でもなあ。それはそれで向こうについてからが面倒そうだしなあ）

彼はこの歳から高校生だが、その進学先は科学の力で超能力者を開発する学園都市のある学校だ。

そして、そんな街に向かつている彼は生れつきの能力者だ。

『文章形式でイメージした対象を、文章形式でイメージした場所に転移させる』能力である。

ぱっと見、有りがちな微妙な能力だが、その対象が『この世界にはないどこか別の世界の物質や住民』であつても転移可能で、逆に『対象をどこか別の世界に』転移する事も可能なのである。

故に、新座はいろんな世界の人々に知り合いが多い。

さて、閑話休題、そんなことを考えていた新座は、周りに気を配るのを忘れていた。

事実、一人の女性とぶつかってしまった。

「あ、すいません！」

女性が持っていた紙が地面に落ちた。それは、新座ももらつた、学園都市のゲートまでの道程を示した地図だった。

「あれ？ 貴女も学園都市に？」

「……とこいつ」とは貴方も？」

二人はしばし見つめ合い、

「奇遇ですね」

「奇遇です」

「よかつたら」一緒にいかがですか？」

「ええ、構いませんよ？」

女性の方から誘われた新座は、これで迷うことないだろ？と思つた。

「へえー、生れつきの超能力者さんなんですか。私と一緒にですね」「え？ 貴女もですか！？ ……。ちょっと偶然なのかこれ」「そうですね……。面白いまでに重なりましたね……」

そんなことを話しながら、近付くにしたがって、その高さをあらわにする学園都市の外壁を新座は見て、

「しかし、学園都市か～。平穩な所だといいな。」

「そうですねー。能力者同士の抗争とか、弱肉強食の世界になつているとか、そんなのごめんですよ。まあ、もしそうなら、私の能力が通用すればいいのですが。」

「どんな能力なんですか？」

「秘密です。学園都市についていたら教えますよ。新座さんは？」

「そつちが秘密ならこつちも秘密です」

「意地悪……」

そんな会話をしている内に、学園都市のゲートにたどり着いた。

幸い、同じ学校に入る予定だったので、二人はゲートを抜けた後も学生寮まで一緒に向かった。

学園都市に入つて一週間少々過ぎた。早くも、今日で二日目の登校日だ。

今日は能力が概ねどのよつた感じなのか、そしてその後実際に使って能力測定。といった日程らしい。

「はあ～、いくらなんでも、まだ二日目なのにいきなり能力の測定だなんて……」

「まあまあ、全力を出し切ればいいんですから」

「そこなんだよ。俺の能力、自由性が高すぎるからさ。逆に手加減しないとやっぱそうな気がするんだよね」

そう、新座の能力は、『対象や場所の詳細を問わず、想像したもの想像した通りに飛ばす』ものだ。

故に、自由性に関しては彼の右に出るものはないだろう。

「どんな能力なんですか？ 本当に。意地悪はもうなしで。私も教えますから」

「……。幻想移動って言つんだ、俺の能力。あくまでも俺がそう呼んでんだけどね。」

「幻想移動？」

「ああ。」

新座は自分の能力を前橋に説明した。すると、心底驚いた顔で、

「へー、それは確かに手加減しないとやばそうですね。下手すると自由の女神とかエッフェル塔とか、ロンドンのビッグ・ベンも?」「多分……。やつたことないからわからんが。それに、地表の一部を移動する」とともに出来るし。実際山一つ移動させたこともある。」「いじやない別の世界でだけど」

「おはようございます皆さん。ホームルームを始めるのですよー」

担任の月詠小萌が入ってきて、ホームルームが始まった。

時間は立ち、新座が能力を調べられる時間になつた。

「新座ちゃんの能力は空間移動のようです。よかつたですね、強能力は絶対なのですよ? 専攻ではないのでどうなのは知りませんが」

「へえ……あのさ、空間移動能力の専攻ってだれなんですか?」「確か……」

そう言って、小萌先生は空間移動能力者の担当教師を新座に教えた。

「君がその、空間移動能力者か。では、早速調べて見よ。」

そういつて、新座は頭に電極を取り付けられた。

「…………。ふむ、君の能力はかなり変わってるね。」

「どうこうふうに、ですか？」

「ふむ。本来、空間移動は普段3次元で捉えている世界を11次元に置き換えて、11次元上でどれだけ移動するかを演算し、さらにそれを3次元に戻さないといけない。が、君の場合、言うなれば、11次元に置き換えることなく、対象を別の何らかの方法で移動させるみたいだね」

「…………。物心ついた時には普通に使つてたのでそれがどうすごいのかはわかりませんが、とりあえず変わっているというのはわかりました」

「なら、早速測定…………と行きたいところだけど、この学校に空間移動能力の測定気はないからどこか別の学校で出来るよう手配してくから。」

そして、判別は終わった。

教室で待機することにしたが、何分することがない。

「つむ、言えにある漫画でも読むか。……いや、ここのは小説かな」

待ちながらそう呟いていると、教室のドアが開いた。

「あー、新座さん！ 新座さんも常盤台中学に？」「そうなんだ」「なら、どうしましょ？ 能力使はんですよ？」「まあなー」

そつ、だから時間が余つて仕方がないのだ。
一応一人で行くことになったのだがやることがない。

どうしようか迷つていると、

「あれ？ 一人とも何やつてんの？」

クラスメイトの上条当麻がやつてきた。土御門元春も一緒にいる。
上条は、新座達が居残つているのに気付いたのでどうしてなのか気になり、話し掛けたのだという。

「俺達の能力はこの学校の設備じゃ無理なんだしさ。」「新座さんの幻想移動も私の亞空間倉庫（インフィニティホルダー）も空間移動系、でこの学校に専用の設備がないそで。」「つてことは？」「午後一に常盤台に。だと」「いへんつとん」

そう労いの言葉を置いて、一人は帰宅するようであった。

(暇だ……。しかも、異性の人と一人きり……って何だこのシチュエーションは)

と、不意に前橋を見ると。

「あー、」

いつの間にか眠っていた。

(俺だけ置いてきぼり……暇だ)

結局、音楽を聴きながら、漫画を呼んでその暇な時間は終わった。

#03 とある暇人の能力測定 後編

12時45分。新座と前橋は常盤台中学の前にいた。

「それで、案内してくれる人は？」

「さあ？ 確か、一年生の方だと聞いておりますが……」

その時、校内から一人の生徒が来た。

「貴方達ですか？ この学校の測定器で測定する人は」

「あ、そうです」

「連絡はいつてると思うのですが……」

「来てるから大丈夫です。案内は私がします」

では、と少女が新座達を連れて歩きはじめた。

「……そういうば、自己紹介がまだでしたね。私、前橋早佳つています。貴女は？」

「美月海奈（みづきみな）です」

「美月、ね。覚えた。俺は新座橋胡。能力は幻想移動つてんだ。」

「イマジン……ムーブメント？」

「そ。イメージした対象をイメージした通りの場所に転移つて能力だな、簡単に言えば。何でも11次元演算とか何とかをしないで別の理論で転移するらしいけどな」

「は、はあ……私も空間移動能力者（テレポーター）ですがそういうのは聞いたことありませんね」

美月は信じがたい顔で新座を見た後、前橋を見て、

「貴女は？」

と聞いた。

「そういうや俺もまだ聞いてなかつたな……。約束は守つてもりつで
？」

「分かつてますよ。……亜空間倉庫つていってですね。私独自の亜
空間に物をしまい込める能力です」

「またアバウトな説明ですね……」

「仕方ないですよ、私自身、それほど自分の能力についてあまり知
らないんですから……」

「知らないって……あ、着いちゃつた……。ま、また後で聞かせて
もらつてもいいですか？」

「へいへい」

そういうと、測定位置に移動した。机が置かれていて、その先には
放射状にラインが引かれている。また、机の上には砲丸投げに使う
よつな球が置かれている。

「では、準備が出来たら始めてください。」

「はい。スキル：ポート輸送準備」

新座は血口暗示により、能力を使用するモードへと意識を移す。

（対象をこの球、移動先を……俺の高校のグラウンドでいつか。と
りあえずグラウンドの中央に指定……）

そして、そうイメージしながら、器材に意識を集中した。瞬間、器
材が何処かに消えてしまった。正確には新座達の高校のグラウンド
に移動させただけなのだが。

「えつと、……指定外への空間移動により、器材座標測定中……現在所在地××高校。所要時間0・01秒。移動先座標指定無しにつき誤差測定不可。総合評価はレベル5」

「えつ！？」

「？」

レベル5と言えば、学園都市でも両手で数えられるほどしかいない人数だ。

それを知らない新座達は美月が驚いているのを見て、何がすごいのか、と首を傾げていた。

その後、球を元の場所に戻して新座は前橋と美月の元に戻った。

「ふう……何か物足りない……」

「物足りないって、……今のでも十分すごいのに……どれだけすごいんですか……」

「そうなのか？」

「あのですね……貴方は、たつた今。学園都市の中でも有数の、空間移動能力者の頂点に立つたんですよ？」

「へえ……で？」

「しかも、座標指定無しつて、じゃあどうやって移動してるんですか？」

「いや、えつと……移動対象と移動先を、文章形式でイメージしてるのでだけだけど……？」

「文章形式で？ 例えば？」

「うーん……例えば……そだな、対象を美月に、移動先を美月の寮の部屋にすれば、文字通り美月が使っている寮の部屋に移動するってな感じかな」

「……、信じられませんね、本当に」

直後、ポンッという、軽いな音が聞こえた。そつ、理科の実験で、水素で満たした集氣瓶の中にマッチ棒を入れた時のような。

「え？」

「何だ？」

新座と美月が見れば、さつきまでなかつたのに、いつの間にかいろんなものが散乱していた。

万年床、枕、鍋、フライパン、落とし蓋、ちゃぶ台、スーパーの袋（中身は良い意味で鮮度抜群の生鮮食品、何故かレシートが貼つてある）等、他にも数えれば言つて100は超えるだろう。

「な、何だ何だ？」

「何でこんなところに漫畫本やら見たことないゲーム機やらゲームの攻略本やらがあるんですか！？」

「見てるものそれ方向だけかよ！」（注・娯楽方向です）

と、測定員が肉の鮮度を確認し終わり、機械を操作した。すると…。

「測定結果、距離50m～200m、各誤差0m、数133、調べた結果鮮度低下率ほぼ0、食品温度低下率0でした。測定結果5です」

と測定員が言つた。

「一体何が起きたんだ？」

「さ、さあ？」

最早、何が起きたももう驚く氣力もないと言わんばかりの声色で、美月はそう返した。

「今の、何したんですか！？」

「え？ 亜空間倉庫に仕舞つたものを出しただけですけど？」
「仕舞つた……亜空間倉庫……インフィニティホルダー……なるほどなあ。」

二人は、まだ学園都市に入つて間ないので、どれだけ自分が異常なのかを気付いていない。よつて、素のままでお互ひ会話をしていたが、美月には最早追いついていけない領域であった。

「新座さんも前橋さんも、反則的な能力ですね……」

「…………、」

常識人である美月が何とか絞り出して言つたそれは、イマイチ一人には良くわからなかつた。まあ、当然だらう。生まれた時から持つている能力故に、一人にとつての普通は美月達にとつての反則なのだから。

#04 異世界の戦友（前書き）

概ね1ヶ月ぶりに更新しました。

#01の『別世界に知り合いがいる』のフラグ回収話です。

新座橋胡という人物は、稀有な能力を生れつき持つている。故に、その交友関係も他の人と比べると、一部ではあるが非常に変わっている部分がある。

というのも、十一歳の時、とある異世界に勇者として召喚されたことがあつたのだが、その時の付き合いが未だにあるのだ。さらに言えば、勇者として召喚されたのは自分で無く、並行世界にいる別の人も呼ばれていて、その人とも交友関係にある。

異なる世界や平行世界の人間と交友関係にあるなど、普通では考えられないが、それがありえてしまうのが勇者クオリティである。まして、それにプラスで『幻想移動』などという能力があるのだから、なおさらそんなことがあってもおかしくないだろう。

さて。そんな変わった交友関係を持つ新座ではあつたが、ここ最近、学園都市に入るための手続きで異世界へ訪ねる機会がなかなか作れなかつたので行けなかつた。

しかし、学園都市に入つて時間が経ち、早くも四月は下旬になつた。都市の雰囲気にも若干慣れ、勉強にも余裕が出てきた新座は、それら別世界の人のうちの誰かに会いに行つてみようかと考えている。

だが、誰に会いに行こつか、というので迷つてているのだ。

「一夏はIS学園とかいう女子校に入つちましたみたいだし、シャロンは政務とかあるつてこの前言つてたから、会うのにすごく時間がかかるつて一泊二日じゃ無理だから論外……となると、妥当なのは凜だけか……つーか、一夏モゲ口つて話しだし。何だよ女子校つて『いざ知り合いから聞いた近況を思い出して見れば、約一名羨ましい……もとい、異例な入学をした人物がいたことで最後にものすごくイライラしたが。何にせよ、まともに会えるのは一人だけ、という結論がでた。

「ま、手ぶらじゃ何だし、何か土産でも買つてくれか」
最後にそう呟いて、新座は寮の自室を後にした。

時刻は過ぎ、夕方。場所も変わって、とある並行世界。日本の、
冬木市という街に、その人物は住んでいた。

その住居は豪壮で、まるで貴族でも住んでいるかのような洋館で
あつた。だが、そんな洋館に住んでいるのはその人物、ただ一人だ
けであった。

「……はあ。何と言うか、最近アイツと会つてないな……。そうい
えば、向こうで春になつたら学園都市とやらに入るとか言つてたけ
ど、そんなに大変なのかしら」

なんて、お前は恋する乙女かと言いたげなその人物は、代々続く
名門魔術師『遠坂家』の当主であり、名前を遠坂凜とおさかりんと言つ。

魔術師と言うのは、文字通り『魔術』という、人の力で神秘を引
き起こす異能力を扱うもののこと。ただし、その殆どは『天
上の意思』と同意義であろう、『根源の渦』への到達を目指してい
て、引きこもりのテロリストっぽい人が多いのだが。

だが、そんな魔術師にも人並みに心はあるわけで。

凜は、魔術師の名家に生まれたからか、人と接するのを控える傾
向にあり、あまり友と呼べる人がいない。故に、話し相手となると
その数少ない友達しかいないわけなのだが……。

だからこそ、気になる。特に、過去に異次元世界に召喚されたと
いう経歴を持つ彼女にとつては、平行世界の人間でありながら一時
的に時間を共有した人物の存在というのは、大きいものである。そ
の上、自身が目指す、宝石魔術の最終到達目標である『第一魔法
平行世界の運用』に別の形で到達している人ということも相俟つて、
魔術師としても大きいものとなつていて。

凜自身は魔法には至つていないので、向こうからちょくちょく
会いに来るので、昔なじみの『戦友』として、今でも付き合いはあ
る。また、それ故に、たまに研究にも付き合つてもらつたりもして

いるのだが……。『かんせん』いつも長い間会つていないと流石に心配になつてくる。もしかしたら何かあつたのではないか、と。

だからこそ、突然目の前に現れた件の『戦友』、新座橋胡が現れたときには、

「きやつ！？ なつ！ だ、誰よ！」

驚いてガンドを撃つてしまつた。

「おわつ！ やめ、凜、俺だつて！」

「何よ、あんたなんか、知らな……つて、なんだ、橋胡じやない」

「ああ、俺だ」

「はあ。相も変わらず、あんたはビーフしてやつ急に現れ出るのよ」

「はつはつは。神出鬼没、因果逆転のキョウ」と新座橋胡だからな

笑えないわよ、と呆れながらも嗜める凜。

かくして、二ヶ月振りの再開は、ここに果たされたのであつた。

#05 新座の田舎（前書き）

凜と思わないほうが良いかも知れませんよ。

「で？ 学園都市つてどんな感じなの？」

凛が新座に問いかけた。新座は少し考えて、

「んー、そうだな……能力開発つてのがあるつつたよな？」

「ええ。言つてたわね、そんなこと。にわかには信じられないけど」

「あれな。実際に受けた感じでは心象世界の確立と魔術回路の覚醒そのものだな」

「え？」

少し意外そうな顔をする凛。ただ、実際のところ凛自身も、科学の力で超能力を生み出すなど眉唾物だと考えていたので、本当にほんの少しだつたが。その眉唾物が、本当に眉唾物だったので、なんとなく呆氣がない、と言つのが本音だ。

「実際、錠剤メトセリンとか散剤エルブラーを解析したんだが、ありやめちゃくちゃとはいえ、本物の魔法薬の類だつたぞ。まあ、魔術回路をほんの少し活性化させる程度のものだつたし、魔法薬としては素人でもぼんぼん作り出せる程度のものだつたけどな。どうやつたら科学者が靈薬に辿り着けるのか、調べてみればとんでもないことが出てきそうだな」

だから、それを聞いたときには驚いた。

「そう……。じゃあ、学園都市が超能力を開発しているつて言つのは、『私達』からすれば」

「ああ。魔術を学ぶための学び舎、もしくは『根源の渦』に辿り着くために『普通ではない人』……超能力者と言つ名の、魔術師自体を研究するための、巨大な工房と言つたところか？」

「……」

両者共に思わず瞑目。そして、先に目と口を開いたのは、凛だった。

「あんたもずいぶんと厄介な街に入ってしまったものね。魔術師の

工房の基本、知つてゐるんでしょ？」

「まあ、外から来る敵を寄せつけない、かつ、中に入つたものは逃がさない。だろう？ 実際、街の外周は厚さ五メートルの隔壁に囲われてゐるし、殆どの学生は定められた手段を踏まないと街の外に出してもらえない。そして外からの侵入者対策は、入場許可証を持つた人意外の入場禁止。それも身内や業者でなければ殆ど無理と来た。条例で作られたとはい、正しく工房だな……。転移の魔術でも使えなければまず脱出は無理だな」

実際には、衛星で常に監視されているので、殆ど逃げられないのだが。そんなことは新座はまだ知らない。

凛ははあ、と溜息をついた。まさか、自分の戦友が、そんな厄介な都市と氣づかずに入つてしまつたことに、いささか同情の念を抱いたのだ。いや。気付いていたのだろう。でも、入らざるをえないナニカがあつた、と言つことなのか？

いずれにしても、恐らくは、それだけではあるまい。魔術師の工房と言うのは、それ以上に厄介なのが何十にも仕掛けられた罠なのだ。厄介な条例だけで收まるとはとても思えない。

「でも、何でそんな危険があると知つて、わざわざ入つたのよ」「いやな。妹の消息が途絶えたんだよ。確か、一年くらい前だつたか？ それまでは連絡取り合つてたんだけど、ある日を境に連絡が半年以上取れなくなつてさ」

「ただ連絡を取り合うのが面倒になつただけなんぢやないの？」
「それだけならまだいいんだけどな……はあ。何ていうか、そう楽観視しても行かなくなつちまつたんだよ」

今度は新座が、はあ、と凛よりも深い溜息をついた。心なしか、浮かない顔をしていて、凛も何かあつたのか、とようやくここで気付いた。

「……？ どういうこと？」

「それがな……。大覇星祭つていう、学園都市全ての学校が参加する、大運動会があるんだけどさ」

「それはまた、スケールが大きいわね……」

「……こ……たんだ」

「え?」

あまりにトーンが低い、絞り出すよつた声。それでも、なんとか聞き取るつとして、もう一度と促す。

「出でこなかつたんだよ、どの種目にも。大霸星祭は文字どおり、学園都市の全学校、全校生徒が必ず一種目に参加しないといけないのに……どの種目にも、いなかつたんだ……。おまけに、そのことを学園都市側に問い合わせてみても、連絡が付かなくなつた翌日から、一切学校にも来ていないつて」

「…………、」

声が、出ない。だが、凛にはその後の展開が、なんとなくわかつた。

新座自身、そのあとの妹の末路を知つてゐる。何故なら、「それで、とても、不安になつて、能力を使つて呼び出してみた。そしたら、あいつを……」

凛は、「クリ、と喉を鳴らす。恐らくは、この後に出てくるのが、新座が魔術師の工房も同然と知つてなお、学園都市に入つたその理由に相違ない、と当たりをつけたからだ。

「確かに、死んではいなかつた。けどさ……あいつの目が、表情が闇に染まつてた。俺は勇者として、国の暗部とも戦つたことがあるからわかる。あいつ、暗部組織の構成員特有の空氣纏つてたんだ」

「……、そう。じゃあ、あんたは」

「ああ。学園都市の暗部から、あいつを救い出す。あいつは確かに暗部の空氣まとつてたけど……あのときのあいつは、それと同時に、助けを求める人の目もしてたからな……。勇者として、それ以前に身内として、放つておくことなんて出来ないさ」

「そう……。手を貸す気はないけど、これだけは言つとくわ。死ぬんじやないわよ」

「ああ」

危険を承知で虎の穴に入る他人に手を貸すなど、心の贅肉。それでもそれを捨てきれない彼女はしかし、せめてと言わんばかりに、そう言うのが精一杯だった。それは、いくら新座が異端名魔術に恵まれて居るとは言え、そもそも自分が魔術師であるなしの前に、別の世界に干渉すること自体が間違っている、そう判断したからである。

深夜。

新座はバルコニーに、一人で佇んでいた。

今の冬木は、そろそろ十一月に入ろうかと言うところ。新座と共に呼ばれた凛は、新座の世界からすればほぼ六ヶ月ほど の時差を持つて呼ばれていた。

そして、新座の能力は世界を渡る際の時間指定方法は、『指定した場所（人物）に最後に行つた（会つた）、最も新しい記憶の日時からどれだけ時間がたつたか』という方式だ。

故に、新座が凛に会おうとすれば、能力使用の過程上、召喚時の凛がいた世界と新座がいた世界との時差が見事にそのまま受け継がれてしまうのだ。

故に、新座の世界では四月下旬だったのに対し、凛の世界では十月末となっているのだ。

思い返せば、ずいぶんと葛藤した。

学園都市のそれは、条例を調べて見れば魔術師の工房も同然だった。招かれざる客は中に入るのを拒み、逆に入れば出ることを拒む。

そんなブラックボックスの最奥に捕らわれてしまった新座の妹。

それをどう救うべきか。それとも……。

『私には、もう光の中で暮らす資格はないから……』

救わないで放つておくべきか。そう考えた途端に思い浮かんだのは、妹を能力で呼び寄せた際に見た、暗部の雰囲気を纏いながらも何処か泣き出しそうな顔をした、自らの妹。

それは、かつて異世界で勇者として数々の暗部と戦い、時に暗部に落ちたもの達を救つた新座からすれば、『助けて』といつサインに聽こえた。

故に。そんな葛藤を何度か繰り返した新座は、高校以降は学園都市へと入り、妹を暗部から救い出すために暗躍しよう、と決めたのだ。

「……咲弥」

その時のこと、回想していると。不意に、意識していないのに、妹の名が口から出てきた。

「大丈夫よ、あんたなら、きっと」

「……凛」

後ろから急にかけられた声。当然、凛のものだ。恐らくは、無意識に発した新座の声を聞いたのだろう。

「私達は異世界で、幾人もの人を救つてきただじゃない。忘れたの？」

私達四人の『絆』……」

そう言つて、凛は腕を差し出した。煌びやかな装飾の腕輪を嵌めているのが見て取れる。

そして、

「ああ。忘れるわけがないわ」

新座も、スウェットの裾をまくつて、凛に見せた。そこにも、同じ装飾の腕輪があった。

「勇者つて名目で、いろんな国を回つて、その汚いところを見て。それを一夏が許せないって言つて、一人突つ走つたのを呆れながら俺達でフォローしたんだつけ」

「今度はそれが、一夏じゃなくてあんたの番になつたつてだけよ。あんたは一人じゃない。魔術師としての私は干渉出来ない。けど『仲間や仲間の身内を傷つけられて黙つていられるほど、勇者としての私は非情じゃないわよ?』と、凛は新座に対し、そう伝えた。そこにいたのは、魔術師としての遠坂凛ではなく。

「……ああ。そう、か……ありがとうな、凛……」

正しく、異世界で数多の魔術を扱つてきた、『大魔術師』の凛であつた。因みに一族の夢であつた第二魔法『キシュア・ゼルレッチ』では無いものの、次元干渉を行えるほどの力を受けたのは秘密である。

「おだてても何にも出ませんよ？……フフ」

眞面目に礼を言え、逆に凛は茶化す。

そんな場の雰囲気に、新座は忘れ掛けていたことを思い出せてくれた凛に、再度、感謝をした。

#06 遠坂邸で朝食、そして

翌朝。遠坂邸で一泊した新座は、目を覚ますと寮の自室から衣服を取り寄せて着替えた。そして、リビングへと移動した。そして、そこで黙々と朝食をとっている凜を発見して、挨拶を交わす。

「おはよう、凜。そつちも今日は休みだっけ？」

「…………そ、うよ」

眠たげな顔をしてそう返す凜は、新座とともにとある異世界を救った勇者のうちの一人……に違いないのだが、如何せん通常時の朝にものすごく弱い。これが緊急時や臨戦時なら問題ないのだが、普段の寝起きは幽鬼かと疑うほどの形相なのだ。

見れば、朝食を摂つていても幾分その表情が和らいではいるが、未だ幽鬼のような表情は抜けきっていない。

久々にその顔を見て、新座は内心苦笑した。

（やれやれ……。あの寝起きの悪さに、どれだけ俺や一夏が苦労したことか）

勿論、凜も一人がそう思つていてことに気付いていないわけではないのだが。どうしても、直せないものの一つや二つは人間あるはずだ、と本人も諦めてしまつている。そうなつては最早どうしようもない話である。

新座が内心で苦笑していると、今度は凜が話し掛けた。

「そういえば一夏は？」

「あいつか。あいつはなー、一月に会いに行つたらEIS学園つづ一女子校に特例で入ることになつてたっぽい」

「EIS学園つづ一……。そこつて、ようはEISだか何だかの操縦者育成校つてことでしょ。あいつ男なのに扱えるの？」

凜もたまに新座と一緒に、異世界へ召喚されたもう一人の仲間、

『織斑一夏』という人物のいる世界へ行くことがあるのだが、その時にその世界特有の兵器の存在と概要を知った。だが、その概要を知つていれば、凜の感じた疑問も当たり前である。

曰く、その兵器は既存の兵器をただの鉄屑に変える程の火力があるとか。

曰く、その兵器は防護機能が超一級品であるとか。

曰く、その兵器は女性専用で、女尊男卑社会形成の礎となつてしまつたとか。

そんな色んな意味でとてもない兵器らしいのだが。女にしか扱えないと聞いていた兵器を男であるはずの、件の人物である、織斑一夏が扱える理由など、当然新座にわかるわけもなく、

「いや。俺に聞かれてもな……」

「そうよね……。全く、あいつもあいつで厄介」とばっかり抱えるわね

これから仲間に降り懸かるであるが、災厄の数々を見越して、二人して嘆息した。

「そうそう、橋胡。あんたが来たら頼みたかったことがあつたんだつたわ」

「ん？ 何だ？」

凜からの頼み事。大抵は予想が着くが、一応聞いておくか、と新座は促す。

「えつとねえ。何と言つか……『宝石とか魔法金属がなくなつてきたから……その、何て言うか……』

「ん？ ああ、『向こう』に行きたいんだな？」

そして、その予想は果たして、的中していた。

向こうの世界とは、新座達が『魔王を倒すため』というありきたりな理由で勇者として召喚された異次元世界のことである。

何故務めを果たしたその世界へ宝石稼ぎに行くかというと、別段、魔王討伐に対する報酬の未収金がある、というわけではない。その

世界では、魔王以外にも暗部に対するカウンター テロや幻獣駆除等の依頼も結構あった。しかし、当初の召喚された目的とは違うため、それらの依頼に関しては別口で報奨金を得られる。そして、実は務めを果たして帰還し、随分と経った今でも、まだそういう依頼が数多く存在するのだ。

因みにそういう仕事は本来ならば『冒険者ギルド』といつてころで依頼を受けた冒険者の仕事なのだが、たまによほど厄介な仕事が、勇者足る新座達に直接回ることもある。

とかく、凜は新座に、『金稼ぎたいから向こうの世界に飛ばせ』と言つてゐるのだ。

「ええ。頼めるかしら？」

「ああ、わかった。帰りはどうする？」

「そうねえ……明日の夕方くらいに迎え、よろしく頼むわ

「わかった」

「一泊二日。それだけで何が出来る、と常人が見れば言つだらうが。元勇者を侮ること勿れ、それだけの時間があれば竜種すら討伐は可能だ。それ以前に、凜は向こうの世界の口座に、結構な金額を預金しているので、實際にはそんなに時間はかかるないだらうが。

それでも今日明日の二日間必要とするのは、いろいろと見て回り、選別をしながら買いたいからだらう。わかつたとき、意外と時間は早く過ぎるものだ。

朝食を食べ終わったところで片付けを直ぐに済ませ、新座は持ち込んだ荷物（といつてもそんなに持つてきていないので）を転移させて凜に問い合わせる。

「んじや、早速行くか？」

「まだ支度してないから一寸待つてて頂戴。万が一、ということも考えないと」

そう言い残して、凜はリビングから出ていった。

そして待つこと十分。

リビングに戻ってきた凜は、独特な装飾の施された、槍を背負っていた。さらに、衣服は何等かの礼装と思しき赤いコートを羽織っている。

「お待たせ。行きましょう」

「了解」

ニツ「コリ」と笑いかける凜に、若干見とれつゝも新座は、
「スキル・ポート輸送準備」

異次元世界へ移動すべく、真面目な演算を開始した。

それからの学園都市での生活も、新座にとっては順調であった。学校では授業は真面目に聞きながらもクラスメイトと馬鹿騒ぎして、開発の授業では適当に講義を聞いて、実技は程々に手加減をする。因みに登下校は何時も前橋と行動をともにしている。

そして休日はほぼ十学区の廃ビルで魔術の研究、たまに前橋と一緒に出掛けるという自堕落な生活を送っていた結果、気付けば既に六月に入っていた。

そんなある日。

新座がいつも通り、前橋と歩いて帰つていると、やけに人だかりができているのに気づいた。

「あれ？ なんだろ。騒がしいな……」

「だね。何かあったのかな……」

因みに前橋もさすがに時間が経つて周囲の雰囲気に溶け込み切れたのか、今は同級生に対しては碎けた話し方をしている。

さて、騒がしい人だからに混じつて、その中心を覗いて見れば、柄の悪い学生達に囲まれた、一人の女子生徒がいた。どうやら絡まれているらしい。かなり苛立つている様子だ。

「……何と言うか、上条でも無いのにこういった展開にぶち当たるなんてなあ。俺もあいつの不幸が移ったのか？」

「まあ、確かに厄介事の気配が充満してるよね……」

新座の物言いに、前橋も若干引きながらも同意する。

新座としても前橋にしても、この場で野次馬として成り行きを見ている他の学生にしても、共通の心理としてはここで少女を見捨てるのは簡単なのだが、そうすると良心が痛むのでそうはできない。かといって警備員に任せつ切りでは到着が間に合うかどうかが疑問だ。

残るは、どうにか介入して少女をこの場から救うか、に限られるのだが。

相手は無能力者故に肉体の力に任せて暴力を振るう不良集団だ。

従つて、安易に近づいては例え成功してもその後で報復にあつ可能 性がある。

だからどうしても手を出せないのだ。

もつとも、この状況下において、ただ一人だけ、別のことと思つ ている人物がいるのだが。

（はあ……）う言つときに限つて、下手に助けようとするとかえつ て面倒臭いことになるんだよな）

新座である。

新座にとつてはこの状況にあまりいい思い出はない。勇者時代で も、人助けをしたつもりが、自分で何とかなつただの、見事な手腕 だだの言われて挙げ句の果てに決闘や命懸けの追いかけっこになつ たことは数知れない。

率先して人助けをしようとしていた一夏が幸運Eくらいだつたの だろうか。それに巻き込まれる新座や凜も不幸といえども不幸だが。 ここは地球だからありえない、とは思うのだが、こと魔術 こ の街にとつての超能力を扱う者が蔓延るこの街でもその常識が通用 するとは思えない。

「貴方達、いい加減にしたらどうですか？」

（つてうおーい、何してくれちゃつてるんですか前橋さん！）

あれこれ考えた末に、このまま放つておいて、少女よ、君は他の 人に助けてもらつてくれと言わんばかりにこの場を去るつと結論を 出しかけていた矢先に、知り合いの声が聞こえてきた。

それは前橋の声だつた。

「何だてめえ……つて、おお！　この娘もイイ。ねえねえ、これが ら俺達と楽しいことしない？」

「あ、いや、離して……つ」

しかも、止めに入つて逆にナンパされている。ようはより悪化し

てしまつたのだ。

これで賽は振られてしまつた。流石に前橋が絡まれた以上、新座は放つておくわけにはいかなくなつた。前橋は喧嘩慣れはないし、相手を傷つける覚悟はないだろうから能力で亞空間に仕舞つているものを体内に放出すると脅しても形だけで中身は伴わないだろう。

つまりは用法としては少し違つかもしれないが、ミイラ取りがミイラになつてしまつたのにほほ等しい。朋友以上恋人未満の新座としては助けないわけにはいくまい。

結局、ため息をつきながら、新座も輪の中心へと入つた。

「はあー。悪いな、こいつは俺の連れだ」

「ああ！？」野郎は黙つて

「な！」「こいつ」

当然、度重なるナンパへ邪魔に荒くなる不良達だったが、新座はものの見事に無視し、片手間のように何処かの不良達のたまり場へ飛ばした。

「大丈夫だったか、前橋」

そして、それが終わると面倒臭そうな口調で前橋に話しかけた。

「え、ええ。ありがとう、キヨウ橋」

そう感謝の意を示した前橋の顔はしかし、少し優れない。

最初はナンパから解放されてほつとしたのだが、すぐあとで自分は身を呈して助けに入つたのに何も出来なかつたという恥辱と、こうもあつさりと終わつてしまつては自分は何をしていたのかわからぬい、という苛立ちを感じ出したのだ。

「つたく、ミイラ取りがミイラになつてどうすんだよ」

そして、新座の不機嫌そうな言葉を聞いて、じゃあなんで新座はすぐに助けようとしなかつたのか、と不満を抱いた。肝心の新座はもう前橋ではなく少女に視線を向けていたが。

「で君は大丈夫だったか？ 見た感じは助けに入るまでもなく平氣
そうだつたんだけど」

「……へえ、私のこと知ってるんだ」

苛立ちを残したまま、というよりはより苛立つたような顔をして少女は新座に挑発をかける。

「いや。でも、君の苛立ちよつ、尋常じゃなかつたし。普通なら困惑するか、前橋の反応が普通のはずなのに、君はそんな様子はなかつた。人だかりの出来ようから結構時間が経つてる」

しかし、高圧的な少女も、新座の言葉には興味深そうな顔をして聴き入つた。こんな返答をされるとは思わなかつたからだらうか。「じゃあどういうことか。恐らくは能力に自信があるか、もしくは喧嘩慣れしているか……。そう思つたんだが、違うか?」「あんた、そこまであの短時間で考へるなんて頭いいわね

「まあ、伊達に原石のレベル5やつてないしな」

「レベル5?」

「ああ。んで、そのことは置いといてだ。まあ、推論で言えばそんなわけなんだが、俺の推論には穴がある。が、それは別のことだ塞がれる。何故かわかるか?」

「何?」

レベル5という単語が出てきた際に若干眉を動かした少女だが、再び始まつた新座の知的な言動に少女もまた聴き入り始める。

「お前、超能力使おうとしてたろ。それも大き目な奴

「え!?」

さらりととんでもないことを口走つた新座にその場にいた人すべてが驚いた。

「どうしてわかつたの!?」

今まで徹頭徹尾高圧的だつた少女ですら、この驚きよつだ。しかし、新座は涼しい顔で、

「それはこの街じゃ公衆の面前で言えないから、知りたけりや後日聞きに来てくれ。ああ、連絡先についてはほれ、これが俺の番号だ」携帯電話の番号をたまたま持つっていたメモ帳に番号を記して少女に手渡してさっさと立ち去つとする。

「あ、待ちなさい！」

少女に呼び止められ、足だけは止める。が、聞くことは何もない、とでも言いたいのか、少女に見せたのは背中だ。

事実、新座の口から出たのは、

「待たない。助けに入んなかったのはそういう理由があつたのもあるけど、もう一つ、後日君に追い回されるのが嫌だからっていうのもあつた。君、自分で解決しようとしていたのに他人に介入されると苛立つ性分だらう？ それに君は強い奴がいると挑戦したがる質じやないか？ 僕はレベル5だからな、君のような行動的で好戦的そうな奴にとつては恰好の餌食だらうぞ。違うか？」

とても否定的な言葉だったのだから。しかも内容には侮辱とも取れる言葉しかない。

実際には新座のそれは経験から来る憶測なのだが。

「う……」

図星だつたのか、少女は呻いた。聞くに堪えなかつたのか、新座は一端振り返つて、

「……一回だ」

「え？」

「一回だけなら、勝負に心じることを『神出鬼没』の橋胡の名に置いて誓おう

そう言つて、前橋と一緒に去つた。

その後。

ことの一部始終を見ていた前橋は、新座を質問攻めにしていた。

特に、

「『神出鬼没』の橋胡つて何よ

といつ質問のしつこいには辟易したそつな。

翌日。

新座の携帯電話に、昨日の少女から早速電話が掛かってきた。内容は無論「本当にレベル5なら勝負しなさい」だつた。断つても良いが一回だけならと了承した手前、断るわけにはいけない。

尤も、相手がどんな能力はわからないが、基本的に回避率ほぼ100%の新座にとつてはたやすい相手でしかない。

第七学区の河原で待ち合わせることにして、電話を終了した。

「はあ。橋もあの中学生も、どうしてそう好戦的かなあ」

「俺としては話し合いで解決できればそれが一番だとは思うけどな。いざとなれば争いも辞さない点からすれば好戦的といえるか?」端から話し合わずに力ずくで捩じ伏せるわけではないので完全にそういうえるかといえば疑問だが。

「さて、と。それじゃ、行つてくる」

「はいはい。せいぜい怪我しないよう心配をつけてなよ?」

（いや。相手のことを考えると無理なんじゃないかなあ）

そうして一緒に下校していた前橋に辞すると、転移した。

数十分後。

第七学区、河原。

「……来たか、中学生」

「……きちんと逃げずに来たのだけは褒めてあげるわ。それと中学生言つた。私には御坂美琴つて名があんの」

適当な呼び方にイラッとしたのか、髪をバチバチと震わせる少女御坂。どうやら電撃使いらしい。

「今まで名前を聞いていなかつたんだ。仕がないだろ?」

それに、逃げなかつたというのも当然さ。約束したからな。『一回

だけなら『勝負してやると』

「へえ。結構律儀なのね。昨日の態度見てたらいい加減そうな性格してるかと思ったのに」

「つむせー、とぼやきながら新座は構えをとつた。

「で？ 開始の合図はどうする？」

「……じゃあ、このコインが落ちたらつてことで」

『そういうて、御坂はコインを弾いた。

二人して、そのコインを注視する。

コインは綺麗に放物線を描いて、御坂の前方へ飛んで。

放物線が頂点に達すると直前に、御坂も戦闘体勢をとつた。

そして、コインは落下を開始した。地面まで、2m。新座は先ずどう動くか考える。

先程の会話で一瞬だけ見えた、御坂の能力。髪が不自然なまでの静電気を帯びていた。火花が飛ぶくらいに。それは電撃エレクトロマスター使いであること間違ひ無し。どう動こうか。

御坂も同じく、黙考する。

昨日の新座との会話。その中に含まれていた曰くありげな単語、『神出鬼没』とは何なのか。それがずっと気になつていた。今もまだ不明だが、能力に関係するものならば尤も濃厚なのは空間移動系、もしくは認識を阻害する能力。

地面まであと1.5m。

新座は、下手に踏み出すのは危険。先ずは転移をランダムに行つて攪乱し、出方を探るのがセオリーだ、と結論をだす。

重力による加速でコインは瞬く間に地面へと迫る。そして、地面まであと、1mを切つた！

一方で御坂も答えを出した。

転移したところで電磁レーダーからは逃れられない。落ち着いて、現れた先に雷撃を打ち込み続ければいつかは絶対に当たる、と。

そして。それぞれが、これから始まる戦闘の初手について考

えが纏まつたのを見計らつたかのようだ。

「コインは、静かに地面へと着地した。

「能力、スキル・ブイット発動！ 戰術的連続稼動準備！」

戦闘開始直後、新座がそう言葉を発するのと同時に、いや、正確にはそのすぐ後で、雷撃が空を貫く音が響いた。

「……ツ！？」

（やつぱりか……！）

最初の意味不明な言動を除いてはほぼ御坂の予想通りだった。新座は能力行使して撃乱をする作戦に打つて出てきたのだ。

「そこ！」

御坂は即座に電磁性ソナーで居場所を確認すると、雷撃で攻撃しようとする。が、

「甘い！」

「くつ！」

振り返った直後、後ろから声をかけられ、飛び退く。

「やるじゃない

「ふん。まあな」

一応の賞賛はするが、返答は再び背後から。会話による精神攻撃も通用しない。

御坂は再び距離をとり、再度雷撃で攻撃をしようとするが、直後に焼き消える。

そして右横に現れたのを察知して、再びに渡つて雷撃を打つ。

「おおつと

焦つたような声。だが、外れたようで、再び空間移動されてしまった。

（これじゃジリ貧ね……つと、待てよ？）

そこで、御坂は重要なことに気付いた。

相手は空間移動能力。つまり、相手の死角をついた格闘が主だった戦闘方法だ。さらに、遠距離攻撃を当てようとしても、攻撃を察

知されて軌道外に空間移動されれば簡単に躲される。
しかも、死角外に移動する好機を与えてしまい、不利になるだけだ。

だ。

「ここは、不本意でも相手の土俵に乗るしかない。
だが、ただの格闘では済ませない。これはどちらの能力が強いか、
はつきりさせるための勝負なのだから。

「三度も躲すなんて、やっぱり強いわね。でも、こつからは本氣で
いかせてもらうわよ！」

そういうて、御坂は地面に手を向けた。

バチツバチツと音が鳴りながら、地面から何らかの粉塵が、御坂
の手元に集まり始める。

「砂鉄、エレクトロマスターか？」

そう。電撃使いとはなにも電気だけを使うのではない。電気と磁

気、電磁波を操る者のこと総じて言うのだ。

そして、集まつた砂鉄はと言つと。それは、どうみても、剣の形
をしていた。

「『名答』……んでもって、こつからは格闘主体でいかせてもらう
わよ！」

「つておいおい、武器の使用つてありなのか！？」

「何言つてんの、能力で作りだしたんだからありに決まつてるじや
ない」

御坂が作り出した砂鉄の剣を見て、新座は何だそれは、と思った。
しかも、
「チエーンソーみたいに表面が小刻みに振動しているから、触つた
ら少し怪我するかもね」

と言つてきたのだから、カチンと来た。

何だそれは。てつきり能力を発現し合つての勝負かと思つていた
ら、こんな危険な勝負だったとは。

「クッ、引っ掛けてくれるな。能力で作り出した剣ならありか」

「ええ。そうよ。そんなの駄目、とはいってないでしょ?」「クツ。では、俺が能力で『呼び出した』武器も構わない、と言つことだな?」

そういうて、新座は虚空を掴むような仕草をし出した。直後。新座の手の中には、美しい装飾の施された、白銀色の、飾り物かとも思えるくらいの両刃剣が握られていた。ちょうど、ブロードソードくらいだろうか。

だが、おかしなことに、その剣は何やら半透明なもので覆われており、半透明なものも2mくらいと結構長かった。

「な、なによそれ?」

「これが? 剣だが? まあ、ただの剣じゃなくて聖靈が宿つてゐる聖剣だがな。そつちが能力で武器を調達したんだ、こつちが能力で武器を調達しても構うまい?」

新座は剣を横向きで構えた。

「安心しろ。今は刃をつぶしてゐるから怪我はしない」

「そ、そつ……じゃあ再開するわよ?」

そして、趣向がかなり変わったレベル5同士の勝負は、第一ラウンドへと進むのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0866p/>

とある変種の超能力者（イマジンムーブメント）

2012年1月10日18時52分発行